

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：84601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370903

研究課題名(和文) 出土櫛から見た古代東アジアにおける葬制の比較研究

研究課題名(英文) A comparative study of funeral rituals in ancient East Asia by means of the excavated

研究代表者

木沢 直子 (Kizawa, Naoko)

公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：50270773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古代東アジアにおける櫛の系譜と用途を検証した。特に副葬品としての櫛に着目して、古代東アジアにおける葬制の一端を解明することを試みた。東アジアにおいて櫛を副葬する習慣は広く見られる。それらには時代と地域によって異なる様相を確認できる。本研究では、日本列島において古墳時代に行なわれる櫛(竖櫛または複材型の櫛)の副葬が日本独自のものであり、当時の日本列島における葬制と深く関わることを示した。5世紀には韓半島南部、加耶地域に同じ櫛の副葬事例があるが、それは当時の韓半島には見られない櫛であり、副葬方法であった。

研究成果の概要(英文)：In this study we verified the genealogy and the usage of combs in ancient East Asia. Preeminently, we tried to examine several aspects of the burial systems in ancient East Asia through the medium of the excavated combs. There existed the custom of giving combs as grave offerings since ancient times. We realized that the custom using the combs made of bamboo strips appearing during the Kofun Period (mid-3rd century AD) was typical in Japan. It is possible to believe that these combs related directly to the funeral ritual in the Japanese archipelago. Although the same style combs dating to the 5th century AD were excavated from the southern part of the Korean peninsula, they did not originate there at that time.

研究分野：考古学、樹種識別

キーワード：櫛 葬制 副葬品 東アジア

1. 研究開始当初の背景

研究代表者らはこれまで、櫛の「製作技法」と「用材選択」に主眼を置いた調査を行ってきた。その目的は東アジアにおける櫛の系譜と用途を理解する点にあり、その結果日本では、木製横櫛の出現時期が遅くとも古墳時代前期後葉に遡ることを明らかにした。

さらに韓半島における出土事例の調査を通じて、日本における横櫛出現期の系譜を三国時代の新羅地域に求められる結果を得た。一方で日本に横櫛が出現するこの時期は古墳時代中期を中心として古墳に副葬された竖櫛の盛行期でもある。このことから、これまで指摘されてきたように、日本では竖櫛から横櫛へという変遷を辿って横櫛が出現するのではなく、当初からそれぞれが異なる由来をもって併存していた状況が明らかとなってきた。竖櫛と横櫛の用途(性格)の違いは出土遺構の違いに表れる。現在約300以上の事例が確認されている竖櫛出土遺構の大半が古墳の埋葬施設であるのに対し、横櫛は出土事例が少ないとはいえ古墳の覆土から出土した一例を除くすべてが流路や集落跡で確認されている。こうした出土遺構の傾向が日本列島のみに見られる傾向か否かの検証が必要であると考えた。

そこで副葬品としての櫛について、中国と韓半島の事例との比較検証が必要となる。すでに中国では戦国時代以来、櫛が一般的な副葬品のひとつとされてきたことは実際の出土資料や簡牘および文字史料から知られる。また、韓半島でも楽浪漢墓のほか、三国時代の伽耶、新羅地域の墳墓から櫛が出土している。さらに西アジアから中国新疆地域には紡織具として用いられた(織糸として使用する繊維を梳き整えるため)可能性を示す事例が見られる。

こうした櫛の出土状況は当時の服飾、葬制、紡織を含む技術史研究においても示唆に富むものである。さらにこれまで主に金属器や土器を対象として検討されてきた副葬品の比較研究に基づく東アジア地域の葬制研究に新たな視点からの検証の可能性を提起し得ると考えた。

木沢直子 平成20年度基盤研究(C)課題番号20520674 研究代表者 木沢直子
研究課題「木製横櫛の用材選択と製作技法の研究」研究報告書2011年

木沢直子「古墳時代の横櫛」『元興寺文化財研究所創立40周年記念論集』2008年

木沢直子「中国・韓半島・日本における木製櫛の系譜 文字資料を中心とした検証」『坪井清足先生卒寿記念論文集』2010年

④ 新疆文物考古研究所他 “Keriya : mémoires d'un fleuve : archéologie et civilisation des oasis du Taklamakan”, 2001

2. 研究の目的

日本における櫛の起源と系譜、用途について未解明な点が多い。特に古墳時代の一時期にのみ見られる竖櫛の系譜、古墳時代前期後葉に出現し竖櫛と併存する横櫛の系譜とその背景については検討の余地がある。

本研究では日本、中国、韓半島の出土事例を対象として調査を行うことで、これらの問題の解明に取り組むとともに、副葬品としての櫛を通して古代東アジアにおける葬制の諸相の理解へと発展させることを目指した。

特に櫛の副葬品としての意義を比較するために、埋葬に伴う副葬品埋納の習慣について、時代および地域による相違を把握できるように試みた。また紡織具としての実態を検討することにより、今後の紡織技術史研究に寄与する情報の提供を念頭に入れて調査を行った。

総合的には古代東アジアにおける葬制の研究に新たな視点からのアプローチの可能性を提起するとともに、本研究の成果を通じて、今後の考古学研究における有機質資料研究の意義と可能性について広めることも目的のひとつである。

3. 研究の方法

(1) 遺跡出土櫛の実態調査

日本、韓国、中国において本研究に関係する資料の調査を行った。各地域の櫛について出土遺構、共伴遺物、出土状況、材質、大きさ、構造等共通事項を設けて調査し、比較検証のための基礎資料とした。

資料調査では、時間軸を基準として同時期のそれぞれの様相を比較した。また地域ごとに時代の変遷にともなう変化を整理した。そのうえで、装身具や副葬品としての櫛の特徴を明らかにし、その背景から当時の文化や思想面における伝播、交流の一端を検討した。さらにこれまで日本では議論される機会が少なかった櫛の紡織具としての機能と特徴についても検討した。アスターナ古墳群出土資料については大英博物館(英国)のスタンコレクションについて調査を行った。また、新疆于田县吾于来克遺跡出土「木手」は紡織具として用いられたとされる櫛であり、類似資料は大英博物館が所蔵することから、これを調査した。

(2) 櫛の出土状況から副葬品としての櫛の機能・用途を検討した。本研究の前に、東アジア各地域における櫛の出土時の様相には相違点と共通点のいずれも見られることは知られていた。例えば中国では戦国時代以降漢代において出土する櫛の多くが墳墓から出土する。それらは化粧箱に納められた状態である。これに対して韓国では、三国時代の墳墓のほか低湿地遺跡、山城遺跡の貯水池や井戸からの出土も見られる。一方、日本では副葬品としての出土は古墳時代の一時期に現れる前期から中期の竖櫛に最も顕著だが、

横櫛は千葉県金鈴塚古墳の覆土から発見された1例のみである。こうした異なる様相の背景を検討するために、出土資料の調査、整理を行った。

(3) 文字資料における櫛の調査

副葬品としての櫛について、中国の戦国時代から漢代の簡牘のほか、4世紀から7世紀を中心とした吐魯番出土文書の随葬衣物疏に関連する記載がある。このように日本、中国、韓国における櫛に関する文字資料の調査と整理を行ない、出土資料と比較した。日本では正倉院文書と『延喜式』に見られる「櫛」の記載内容について取り上げた。また、中国については「吐魯番出土文書」1)および戦国時代から漢代に出土する簡牘の記載内容の調査、韓国では『三国史記』に見られる「衣服制」に関する記載の検討から実際の出土資料との比較を念頭において調査を行った。なお、「吐魯番出土文書」については主に中国文物研究所新疆維吾爾自治区編『吐魯番出土文書』から情報を得た。

1) 中国文物研究所新疆維吾爾自治区編『吐魯番出土文書』(1992)(中)

4. 研究成果

(1) 古代東アジアにおける櫛の系譜と用途を検証した。東アジアにおいて櫛を副葬する習慣は多く見られ、それらには時代と地域によって異なる様相が見られた。日本列島では、古墳時代に行なわれる櫛の副葬方法が日本列島独自のものであり、同時期の周辺地域には確認出来ない。すなわち、これらの櫛の副葬は、当時の日本列島に特徴的なもので、葬制と関わることを示した。主な調査地と調査資料は韓国羅州市(国立羅州文化財研究所・高興野幕古墳)、金海(大成洞博物館・大成洞88号墳、91号墳)、釜山(福泉博物館・福泉洞53号墳)。

(2) 日本で古墳時代に出現する横櫛は韓半島に系譜を求めることができる。横櫛は日本では埋葬施設からの出土が無い。しかし、韓半島では皇南大塚古墳など新羅の王陵墓において櫛が副葬される。埋葬に伴う櫛の検討から、日本と韓半島で櫛の用法に違いがあることを明らかにした。主な調査地は韓国(国立慶州博物館)。

(3) 遺跡出土櫛と文字資料に見られる櫛に関するデータを分析した。副葬品としての櫛の様相、装身具としての役割、紡織具など異なる用途に用いられた可能性について中国、韓半島、日本における文字資料の内容から抽出し、比較検証した。

また、櫛の製作技法と材質に関する記述内容に着目し、検討することで東アジアにおける加工具、加工技術の発達を検討し、それに基づいて地域間交流、技術伝播について言及した。

(4) 古代東アジアにおける櫛について、紡織具としての機能・用途を検討した。主に中

国新疆地域には「木手」と呼ばれる紡織具として用いられたとされる櫛がある。それらの類似品は新疆以西のユーラシア西部に確認出来る。これまで東アジアでは、紡織具としての櫛について検討される機会が無かった。本研究では大英博物館が所蔵するスタインコレクションについて調査を行い、新疆于田県吾于来克遺跡出土櫛など、関連資料を実見した。主な調査地は英国(大英博物館、ロンドン大学ピートリー博物館)。

(5) 東アジアの櫛のなかには、ユーラシア西部地域に特徴的は双歯櫛が見られる。中国新疆地域のほか、近年韓国でも確認されている。これらについて調査を行った主な調査地および調査資料は韓国(国立扶余博物館・雙北里280-5遺跡出土櫛、錦江文化遺産研究院・軍首里耕作遺跡出土櫛)および英国(大英博物館)。

(6) 以上のほか、櫛の製作具術と用材について調査を行った。ヨーク大学では骨角製櫛の製作技術について、同大学のステーブ・アシュレイ氏よりご教示いただいた。ユーラシア西部では、木材の入手が比較的容易な地域では木製櫛を、木材の入手が困難な地域では骨角製の櫛が製作される傾向があるとのことであった。骨角製の櫛は部分ごとに作製したパーツを組み合わせて作るもので、単一材から作り出すよりも、容易に作る事ができたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

- 木沢直子「正倉院文書「買新羅物解」にみえる「梳」とその用材」『元興寺文化財研究所研究報告2015』(公益財団法人元興寺文化財研究所 2016, pp.77-89.)
- 木沢直子「奈良時代における木材の調達と加工」遺跡出土イスノキ材と正倉院文書にみられる「由志木」『古代学』査読有、第7号、2015, pp.12-25.

[学会発表](計 3件)

木沢直子・小村眞理
「日本における出土櫛の保存と考古学研究への活用に関する研究」

東アジアにおける有機質資料の観察と製作技法の検討を中心に -3rd International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia 2013年9月5、6日 慶州コンコルドホテル

“A study of double-sided combs in Ancient East Asia” -Excavated examples and their origins-
Society for East Asian Archaeology 6th World Conference Final Program pp.47.

主催: Society for East Asian Archaeology 2014年6月7日(モンゴル、ウランバートル モンゴル大学)

木沢直子・呉東墀・鄭巨欣・小村眞理

「アジアにおける櫛の系譜 中国・韓半島・日本を結ぶ形態と製作技術」
「2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良」2015年8月27、28日（奈良県、奈良市 奈良春日野国際フォーラム薨）

〔図書〕（計 1件）

- 木沢直子(論文掲載)『韓国と日本出土「櫛」の比較検討』『高興野幕古墳発掘調査報告書』国立羅州文化財研究所(韓国語、日本語) 2014、pp.235-280。
- 小村眞理・木沢直子 "The Textile Terminology in Ancient Japan"Textile Terminology from the Orient to the Mediterranean 1000 BC-AD 1000 The Danish National Research Foundation's Center for Textile Research 発行予定。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

木沢直子 (KIZAWA naoko)

元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：50270773

(2)研究分担者

小村眞理 (OMURA mari)

元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：10261215

(3)連携研究者

研究者番号：